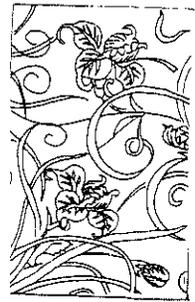


勝林寺報



一人の親

わたしには二人の親がありました。父親と母親です。

どちらも親として立派な人でしたが、その生き方は、二人全く対照的であったと思います。

それでいて、二人は羨ましいほど仲睦まじいご夫婦でした。一度も争ったことを、見たことありません。そして仲良く七年まえ、同じ年にあい前後して亡くなって行ったのでした。

父は厳父。何事にも厳しく対処する人でした。

学校の教師の30年間、あの「解放教育」にかかわり、退職後も町の人権啓発委員として生涯動き続けた人でした。家庭内でも男女差別がだいさらいで、それだけに母も娘であるわたしも最大限尊重してくれたと思います。「人権は平等」という考えにたって厳しく生きた人であったとおもいます。いわゆる「差別」に対して何物にも恐れず敢然と立ち向かって行く父に、わたしはいつも「おとこ」を感じ頼もしく思いました。

しかし、娘のわたしとしては、そのような父は尊敬できる人でしたが、暖かみというか、そっとよりそっていききたいというようにそんな父ではなかったようにおもいます。

それに対して母は、いつでも寄り添って、一緒に悩み一緒に泣き一緒に踏ん張ってくれような人でした。これは娘の私にだけではありません。どんなものどんな人にも、一緒になってというのが母の生き方でした。例えば、差別をする人に対しても、「人を差別するようになったのは、長い長い歴史の

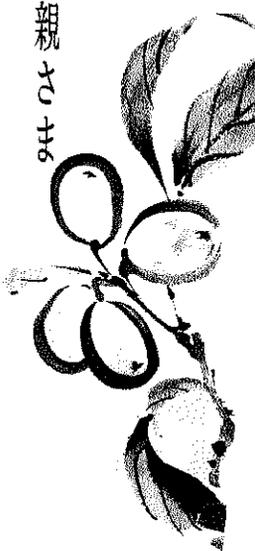
因習のなかでいつのまにかそんな体質になっ
てしまったんだよ。気の毒な人だねー。だから一緒にそんな差別の泥沼からともどもに解放されなれやー」というのが母のおもいでした。

「大悲同感」ということばをお寺様が母の
お通夜のときおっしゃってくださいました。
「一緒に感じともに悲しむ。」
「慈悲」のこころだそうです。

母は、家で飼っている猫ともしよっちゅう
話をしていました。どんなものにも寄り添っ
て話のできる人でありました。私が結婚問題
で人生を悩んだときも、母は、私を赤ん坊の
ように抱きかかえて、一緒に泣き一緒に苦し
み一緒にがんばってくれました。

父と母。わかれてもう七年。いまさらなが
らこの二人の親をもったことをしみじみ有り
難くおもいます。

そして、人の愛のありかたにもいろいろあ
るんだなーと考えるこんだりするこのごろです。



親とこよみ

八十八翁

「おやさま」という言葉は、ずっとずっと
昔、わたしが筒袖の着物をきて草履ばきでは
しやぎまわっていた2・3歳ごろ、のっばら
で私をあそばせてくれたお婆ちゃんから聞いた
言葉でした。

70年も立っていたいま、あののっばらの草い
きれのようにこの言葉がわたしの胸によみが
えってくる不思議さに、わたしはいま目をみ
はっております。と同時に、幼いとき別れた
「おや」のことを、いまのいのちのなかにあ
りありと思ひ出し、それをおしてまた、お
婆ちゃんのいつていた「おやさま」如来さ
まに、「ほのかに、夢に」お出会ってきたよ
うに思うのです。

「親」というものは、自分の身をもかえり
みず木のうえに立って、死んでしまっただけ
でも、また、いつまでもどこまでも、愚かな
こどもであればあるほど、目離しならず案じ
通し願ひ通さずにはおれないもの。それが
「おや」ということが、こんなに年老いてか
らはじめて確信できるようになりました。

これもお婆ちゃんからならったうた
聞いても 聞いても なんともない
なんともないのが おらじゃゆえ
おらがあるゆえ 親がある
落としてはせんぞ

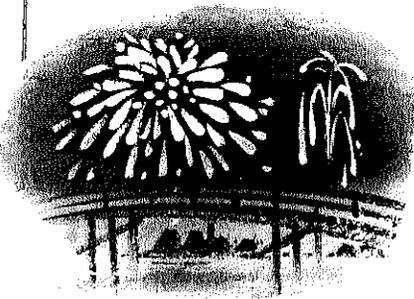
子供は、自分に都合のよいときだけ親に接
近します。都合が悪くなるとサッサと親をす
てます。

親はそうではありません。わたしが忘れて
いても、また逆らって親を捨てた時も、親は
いつでもどこでもどんなであつても子供を見
捨てられないものなのです。

お婆ちゃんは、いつもそんな「おやさま」
のなかに生きていたのだと思います。だから
あんなにまじい苦しい暮らしのなかでも、
「おやさま」と一緒にいのち輝いて生きてい
たのだと思います。

年が寄ったら子供に帰るとよく云われます
が、年が寄って、あの暖かな親の懐に帰るの
なら、こんなありがたいことはないと思
います。

「おやさま」の慈悲の願ひに包まれて、元
気に輝いて老後を生きたいと思っております。



八月のこよみ

- 一日 懇話会
- 二日 亀井孝氏宅忌明法事
- 三日 人権尊重町づくりフォーラム
- 四日 田村ゆき多氏宅初盆
- 五日 仏壮3役会
- 六日 日高町役場
- 七日 正法寺追悼法要 兼井正美氏宅法事
- 八日 分盆△△法壇△△
- 九日 石田和義氏宅初盆
- 十日 岸下豊氏宅初盆法事
- 十一日 数森一男氏宅初盆
- 十二日 森友敏裕氏宅初盆
- 十三日 中嶋庄二氏宅初盆
- 十四日 斎藤利夫氏宅初盆
- 十五日 町外
- 十六日 出石町内お盆まいり
- 十七日 孟蘭盆会法要
- 十八日 中島俊昭氏宅初盆
- 十九日 十六夜会定例法座
- 二十日 福祉盆おどり大会
- 二十一日 検診
- 二十二日 但東やまびこ
- 二十三日 福富 修氏初盆忌明法事
- 二十四日 地藏盆
- 二十五日 山石組御同朋総結
- 二十六日 集大△△
- 二十七日 兵庫布教団法集會 (姫路)
- 二十八日 兵庫布教団法集會 (姫路)
- 二十九日 岩出むら様忌明法事
- 三十日 みのりを聞く会
- 三十一日 出石役場
- 三十二日 宮島哲也氏宅法事
- 三十三日 ビハール全国集會 (若原温泉)
- 三十四日 ビハール全国集會
- 三十五日 瀬尾 勲氏宅法事



老いの今を生きる

もう何十年にもなるのでしよう、あの有名な東井義雄先生にわたしのおやじが書いてもらった色紙。その二枚がいまもわが家の仏壇の間にかがつています。

「独生・独死・独去・独来」(ひとり生き、ひとり死んで死ぬ。独り去り、独りきたる)

なにごとくも結局はひとりという云う意味の言葉です。わたしのいのちを生きるのはつまりわたしが生きて、老いをわたるのも結局わたし独り。だれも代わってくれぬものはあるはずはない。

だから二枚目の色紙には「無有代者」(代わるものあることなし)

この私に代わってくれる者は絶対にあるはずはないのだ。

七十五歳を過ぎた今、この二つの色紙のことが身にしみてわかつてまいりました。

わたしのいえは云わば大家族。若い者夫婦に孫五人。みんなそれぞれに勤めや仕事をもっているものですが、家事の雑用は、自由に動けるわたしが大概引き受けておられます。家族がみんな顔を揃えるのは夕食のときだけ。ところがだんだんわたしの夕食のときも、孫たちも入り込めなくなってきました。子や孫たちは別に私をはねこにしているつもりではないのでしようが、どうも私、家族の輪のなかにはいりこめない。第一みんな早口で、それが聞き取りにくい。全体話題もわたしの知らない世界のことにし。家族団欒の中にあつて「独りうまれ、独り死に。独り去り独り来る」。朝、おはようともいってもらえぬ孤独の寂しき。しかしそれが老いの現実。だれ恨むこともなく自分でこの孤独を背負って行くより仕方がない。「代わる者あることなし」

ところが昨年末の『勝林寺寺報』でござったご和讃(親鸞さまの晩年の今様風のうた)。



南無阿彌陀部をととなえれば(念仏唱えて如来様の願いのなかにある私と知らされたなら)

この世の利益きわもなし(生死まるごと限りない如来のいのちのな)

流転輪廻のつみきえ(生死流転のこだわりを越えて)

定業・中天のぞこり(寿命一杯にいきようと、途中死しようと、すべて如来のいのちのなか)

独りじゃないよ。如来様のいのちの中。人様の事をおもいやりつつ、なるべく人の迷惑にならないよう。わたしはわたしのいのちを精一杯生きていこうとおもっておるところです。



御同朋総結集!

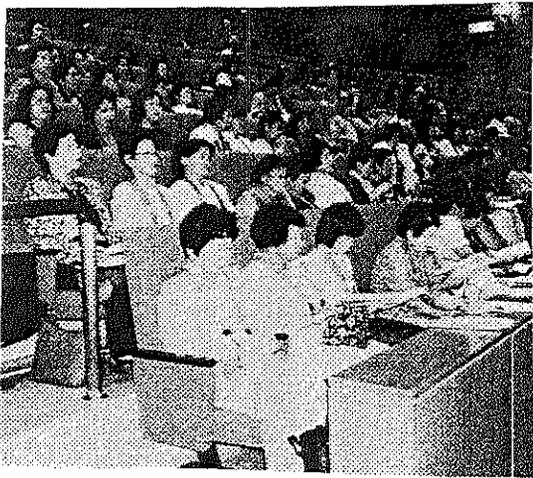
南無阿彌陀仏の如来さまに願われ、南無阿彌陀仏のお名号で呼ばれているお互い御同朋であっても、いろいろな制約やこだわりによって相い隔てられているわたしたちの日々です。そのことを反省し点検して、あらためてまことの「御同朋の社会」を願おうと集い合うのが八月二十四日の出石組御同朋総結集大会です。行事・日程ご確認のうえ各自ご協賛下さい。



兵庫教区仏教婦人会 但馬ブロック研修会に参加して

七月十七日(木)、生野町マインホールで開催されました。但馬地区内267名の参加者中出石組からは66名の参加でした。この研修会は例年「御同朋の社会をめざして」というテーマを掲げて研修してきましたが、今年度は特にサブテーマとして「恵信尼公と仏教婦人」をあげて具体的な取り組みを学びました。したがって講師岩見先生のお話も、ただ恵信尼さまの墓所「こぶしの森」を整備する事業への協賛を呼びかけるものでした。ちなみに「恵信尼」様とは、親鸞様の奥様。生涯親鸞様の伴侶としてお念仏のなかで子や孫を育て共にお浄土へ導いてくださったお念仏の母です。

この研修会の趣旨は全体の雰囲気として理解できたと思いますが、ただ、ご講師先生のお話もお話にもかかわらず、愚かな私たちにはほとんど通じなかつたように思います。「そんな研修会にいったも分かるかしら」と不安がっている若い方を誘ったわたしが、後悔されます。「蛙の面に水」。この方だけでなくみんなキョトンと、ただ壇上をおおいでいたことでした。わたしたちにも通じるお話をしてほしいなとおもって帰りました。



全戦没者追悼

孟蘭盆会法要

八月八日(金)

午後一時 受付 献華 献燈 献香 戦没者呼名

『正信偈』 焼香

国権の主張、民族の正義がぶつかりあって戦争がおきます。その戦争の一番の犠牲者は争いに何の関わりもない子供や年よりや女です。わたしたちはあの満州開拓団の悲劇を忘れる訳にはまいりません。あのことと同じ惨禍がいま世界のいたるところで始まっています。この現実を、この追悼法要をとおして冷静に見つめて見なければなりません。ご参詣、お焼香いただきましたますようご案内致します。

八月十九日(火)

九時半 受付 九時 十七時 解散

ほとけさまのおはなし がいさつのかた おみのりのうた たのしいビデオ おつとめのれんしゅう こうさくやしゅげい など

仏婦とこどもの研修会 仏婦評議員様を通じて十五日までに申込み 参加費 一人 500円 ☆お母さんも仏婦会員も一緒に参加して共に学びましょう

